

特集「現代世界と宗教」

Feature: Religion in Today's World

連続公開講演会「現代世界と宗教」(第一回)

仏教の終末論、神変、そして法華経

梶山雄一

一 法華経における劫火と神変

ご承知の方がたも多いと存じますが、『法華経』の「如来寿命品」には、釈迦牟尼仏は仏陀に成ってから無量百千万億劫、つまり無限ともいえる時間を経ていて、またこれから後もそれ以上の時間のあいだ生き続けるのである、時に人間として死んだように見せることもあるが、実は死ぬわけではなくて常に靈鷲山において生き続け

て、教えを説いているのである、と書かれています。仏が死んだり、生きて法を説いたりして見せるのは仏の衆生救済の方便のためであって、人々は仏の死を見れば仏を偲んで懐かしみ慕うものであるから、そうして人々の心が柔軟となった時に仏はこの世に身を現して法を説くのである、それが仏の神通力である、ということです。

そのように言った後で『法華経』は世界の終わりに起こるといふ大火、この地球を焼き滅ぼして灰さえも止め

ない、という大火災に言及いたします。釈迦牟尼仏の国土であるこの世界は浄土であって、安穩で幸福に満ちているのに、衆生たちはこの世界が「劫火」つまり世界を焼き尽くす大火災によって破壊されると見たり、自分たちも焼かれるという恐れに戦き、苦悩と恐怖に満たされている、と妄想しているのである、と言っているのです。

同じ『法華経』の「見宝塔品」には、大地から湧き出た多宝如来のストウーパ(塔)が空中に懸かり、釈迦如来は全宇宙に散っていた無数の、自分の分身の如来たちをこの世界に集めた上で、多宝塔に昇って、多宝如来の隣に坐り、いわゆる「二仏並坐」の奇跡を現す、という有名な物語があります。その二仏並坐を行う前に釈迦如来は神変を現します。釈迦如来が額の白毫から光明を放ちますと、宇宙の十方にある無量無数の世界の仏陀たちが、その菩薩たちとともに衆生に法を説いているのが見えてまいります。十方の諸仏——その諸仏はみな釈迦如来の分身すなわち化身に他なりません——は釈迦如来と多宝如来とを供養するためにこの娑婆世界に降りてこ

うとします。するとこの娑婆世界はたちまちに浄土に変わります。それらの諸仏とその菩薩たちを受け入れるために釈迦如来は二度までもこの世界を拡大しますが、そのときには地獄・餓鬼・畜生・阿修羅は消え失せ、釈迦牟尼仏の集會に集まっている衆生以外の神がみや人々も他の世界に移されます。また地上の大海・河川・湖・須弥山や大鉄圍山(鉄輪圍山)なども消えてしまいます。この地獄・餓鬼・畜生などが消え、山や川も消えて大地が平らに美しくなる、ということは、後に述べる終末論や神変とも関係あることであります。

さらにこの経典の「如来神力品」では、釈迦如来と多宝如来とは、地中から現れ出て釈迦如来のもとにいた無数の「地涌の菩薩」たちやその他の衆生たちの前で神通力を現します。二人の仏陀は微笑を浮かべ、口の中から広大な舌を出して梵天の世界にまで触れ、多数の光明を放ちます。その光明は宇宙の十方の世界に遍満し、その多数の光線の一つから無数の菩薩が現れて宇宙の十方の世界に散って、教えを説きました。多宝如来と釈迦如来を見るために集まっていた宇宙の無数の仏陀たちも広大

な舌を出して無量の光明を放ちました。釈迦如来や諸仏は長い間その神変を続けますが、やがて舌を収め、しわぶきをして指を鳴らします。この二つの音は十方の諸仏の世界に至り、また大地は六種に震動いたします。そして宇宙の十方の世界のなかの衆生たちはこの釈迦如来の国土である娑婆世界に集まっている無量無数の諸仏、多宝如来と釈迦如来、さらに無数の娑婆世界の衆生たちを見るのが出来ました。十方の仏土の衆生たちが華・香・種々の裝飾や宝石などを娑婆世界の上に散華しますと、それらは大きな帳となつて娑婆世界にいる諸仏を覆い、十方世界は一つの浄土のようになります。

『法華経』にはまだ他にも仏の神変の記述はたくさんありますが、とりあえず上の三つ、「如来寿量品」にある世界の大火災、「見宝塔品」の放光の神変、そして「如来神力品」にある、十方世界の衆生たちがこの釈迦如来の娑婆世界の有り様を見る、という神変をとりあげて説明してまいりましょう。『法華経』自身にはこのような世界の終末や神変の奇跡などについてはなんの説明もありませんし、また『法華経』を読む現代の人々も、これ

らは神話的な物語にすぎないものである、と考えて、その起源を探ったり、意味を考えたりはあまりいたしません。

しかし、仏教には古くから一種の宇宙論がありますし、その中には、この世界の破壊を語る終末論もありました。その終末論も小乗仏教のものと、それが大乘仏教になつてから仏や菩薩の神変あるいは神通力という形に発展したものがあります。『法華経』の「如来寿量品」に現れる、この世界が火災によつて破壊される、というのは小乗仏教の終末論に現れる、世界を滅ぼす「劫火」(世界壊滅の時期に起こる大火災)に言及しているものです。『見宝塔品』や「如来神力品」にあらわれます仏の威神力は大乘仏教の神変を部分的に描いているものです。終末論にしても神変にしましても、その神話は古代の仏教者の思想表現の一つの型でありました。その神話的表現を現代において解読して、そこから思想を引き出すことが実は宗教にとつては大変重要なことなのであります。仏教の終末論と神変は空とか無という思想の小乗的な、そしてまた大乘的な形を語っているものであります。

『法華経』が何度も言及している終末論や神変の思想的な意味については後にお話しますが、とりあえず、それらの物語の大筋を整った形でお話することから始めましょう。

阿含経の中には『世記経』を初めとして、同本異訳と考えられる四経が世界の終末を含む宇宙論を記述しています。それを基礎にして『世間施設論』、『俱舍論疏』など多くの小乗論書が終末論を体系的に叙述しています。大乘仏教になると『法華経』『大品般若経』その他、殆どの初期大乘經典が仏の神変を記述しています。私はこの仏の神変が阿含経における小乗仏教の終末論の大乘的な発展に他ならない、と考えます。さらに、浄土教が一種の終末論であることはすでに学者の指摘する所でありますが、私は『無量寿経』に現れる、阿弥陀仏の他力による衆生救済の思想が、初期大乘經典に現れる神変に根拠をもつていて、その意味で浄土教も仏教終末論の系譜に含められる、と考えています。世界壊滅の時期に起こる火災などの「大の三災」を典型的な小乗の終末論とみなし、大乘の終末論については『大品般若経』の神変を

紹介し、その思想が浄土教の他力思想をも含めて、大乘仏教の「空」の思想に根拠をもっていることをお話し、最後に『法華経』の「藥草喻品」の記述を小乗・大乘の終末論と結び付け、空の思想を簡単に解説してみたいと思います。

二 小乗仏教の終末論——大の三災

小乗仏教の終末論によりますと、この地球は火・水・風の三つの大災害によつて破壊されます。この世界の壊滅は仏が、一切のものの無常を示し、人々に解脱を求めさせる為に説かれるのです。それぞれの災難の直前には人間は仏教を奉じ、十善行を修めていて道徳的に完全であり、平和で安穩な生活をしています。十善行といふのは、殺生・盗み・邪淫・妄語・両舌・惡口・綺語意味のないおしゃべり・貪欲・瞋恚・邪見の十種の悪行を慎むことで、出家・在家を問わず、すべての仏教徒の道徳規範となつていたものであります。

三災はまず火災から始まります。火災が起こる直前に、ある人が色界第二禪を修めて第二禪天に上昇し、禪を妨

な舌を出して無量の光明を放ちました。釈迦如来や諸仏は長い間その神変を続けますが、やがて舌を収め、しわぶきをして指を鳴らします。この二つの音は十方の諸仏の世界に至り、また大地は六種に震動いたします。そして宇宙の十方の世界のなかの衆生たちはこの釈迦如来の国土である娑婆世界に集まっている無量無数の諸仏、多宝如来と釈迦如来、さらに無数の娑婆世界の衆生たちを見るのが出来ました。十方の仏土の衆生たちが華・香・種々の装飾や宝石などを娑婆世界の上に散華しますと、それらは大きな帳とがとなつて娑婆世界にいる諸仏を覆い、十方世界は一つの浄土のようになります。

『法華経』にはまだ他にも仏の神変の記述はたくさんありますが、とりあえず上の三つ、「如来寿量品」にある世界の大火災、「見宝塔品」の放光の神変、そして「如来神力品」にある、十方世界の衆生たちがこの釈迦如来の娑婆世界の有り様を見る、という神変をとりあげて説明してまいりましょう。『法華経』自身にはこのような世界の終末や神変の奇跡などについてはなんの説明もありませんし、また『法華経』を読む現代の人々も、これ

らは神話的な物語にすぎないものである、と考えて、その起源を探ったり、意味を考えたりはあまりいたしません。

しかし、仏教には古くから一種の宇宙論がありますし、その中には、この世界の破壊を語る終末論もありました。その終末論も小乗仏教のものと、それが大乘仏教になつてから仏や菩薩の神変あるいは神通力という形に発展したものとがあります。『法華経』の「如来寿量品」に現れる、この世界が火災によって破壊される、というのは小乗仏教の終末論に現れる、世界を滅ぼす「劫火」(世界壊滅の時期に起こる大火災)に言及しているものです。「見宝塔品」や「如来神力品」にあらわれます仏の威神力は大乘仏教の神変を部分的に描いているものです。終末論にしても神変にしましても、その神話は古代の仏教者の思想表現の一つの型でありました。その神話的表現を現代において解読して、そこから思想を引き出すことが実は宗教にとっては大変重要なことなのであります。仏教の終末論と神変は空とか無という思想の小乗的な、そしてまた大乘的な形を語っているものであります。

『法華経』が何度も言及している終末論や神変の思想的な意味については後にお話しますが、とりあえず、それらの物語の大筋を整った形でお話することから始めましょう。

阿含経の中には『世記経』を初めとして、同本異訳と考えられる四経が世界の終末を含む宇宙論を記述しています。それを基礎にして『世間施設論』、『俱舍論疏』など多くの小乗論書が終末論を体系的に叙述しています。

大乘仏教になると『法華経』『大品般若経』その他、殆どの初期大乘経典が仏の神変を記述しています。私はこの仏の神変が阿含経における小乗仏教の終末論の大乘的な発展に他ならない、と考えます。さらに、浄土教が一種の終末論であることはすでに学者の指摘する所でありますが、私は『無量寿経』に現れる、阿弥陀仏の他力による衆生救済の思想が、初期大乘経典に現れる神変に根柢をもつていて、その意味で浄土教も仏教終末論の系譜に含められる、と考えています。世界壊滅の時期に起こる火災などの「大の三災」を典型的な小乗の終末論とみなし、大乘の終末論については『大品般若経』の神変を

紹介し、その思想が浄土教の他力思想をも含めて、大乘仏教の「空」の思想に根柢をもっていることをお話し、最後に『法華経』の「葉草喻品」の記述を小乗・大乘の終末論と結び付け、空の思想を簡単に解説してみたいと思います。

二 小乗仏教の終末論——大の三災

小乗仏教の終末論によりますと、この地球は火・水・風の三つの大災害によって破壊されます。この世界の壊滅は仏が、一切のものの無常を示し、人々に解脱を求めさせる為に説かれるのです。それぞれの災難の直前には人間は仏教を奉じ、十善行を修めていて道德的に完全であり、平和で安穏な生活をしています。十善行といいますが、殺生・盗み・邪淫・妄語・両舌・惡口・綺語(意味のないおしゃべり)・貪欲・瞋恚・邪見の十種の悪行を慎むことで、出家・在家を問わず、すべての仏教徒の道德規範となつていたのであります。

三災はまず火災から始まります。火災が起こる直前に、ある人が色界第二禪を修めて第二禪天に上昇し、禪を妨

ける計らい（尋）や思惟（伺）のない第二禪の楽しさを地上の人々に訴えます。地上の人間はそれを聞いてみずからも第二禪を修めて第二禪天に昇ります。地獄・餓鬼・畜生・六欲天の神がみ、初禪天の神がみもいったん人間に生まれかわった上で第二禪を修めて第二禪天に上昇します。こうして、あらゆる有情が地上から姿を消してしまうことを「趣壊」といいます。

有情がすべて地上から姿を消してしまうと、七つの太陽が出現して下は地獄の世界から地上の須弥山・七山脈・湖沼・河川や大海、鉄輪田山を焼き、上は色界の初禪天界に至るまでの物質世界を焼き尽くして、灰すらも止めないようにします。しかしこの火災は初禪天宮で止まって、第二禪天以上の色界天は火災を免れます。この火災の及ばない第二禪天を「上際」（後には「頂」といいます。そしてこの物質世界の壊滅は「界壊」といわれるようになります。

有情の消滅と地球の破壊の時期をやや後世の文献は「壊劫」といいますが、その後には空間のみがあつて世界の存在しない「空劫」が長期間続きます。やがて世界

は有情たちのカルマと風と水の力によって復興し、第二禪天から神がみやその他の有情が降下して地球に住み着きます。この世界成立の長期間を「成劫」といいます。成劫の後には成立した世界が長期間存続する「住劫」がやってきます。この住劫においては人間は平和・幸福・長寿の時期と戦乱・不幸・短寿の時期を繰り返して、また戦争・疾病・飢饉といういわゆる「小の三災」を繰り返して受けます。住劫の最後には人間は再び八万年の寿命と平和を享受し、みな仏教を信奉し、十善行を修めるようになりませんが、そのときに時代は再び壊劫に入り、有情の消滅と世界の破壊が起こります。

第二の災害は水によるものです。この水災の起こる直前には人間界のうちの一人が第三禪を修得して第三禪天に上昇し、地上の人々もその人にならない、そして地獄から第二禪天の有情たちもいったん人間に生まれただ後に第三禪を修めて、みな第三禪天に昇天いたします。熱水が長期間にわたって降り、第二禪天以下地上、地下のすべての物質世界が破壊されます。空劫・成劫・住劫を経て再び壊劫がめぐってくると、人間の一人が第四禪を修め

て第四禪天に上昇し、他の人々、ついで人間に生まれ変わった他の有情たちも第四禪を修めて第四禪天に上昇します。ついで第三の災害である風災が起こって物質世界は壊滅しますが、第四禪天のみは災害を免れて残ります。この火・水・風の三災が一巡して地球はその輪廻の一周期を終えるわけです。

火・水・風の三災に際して有情がそれぞれ第二、第三、第四禪天に上昇した後に、初禪天以下、第二禪天以下、第三禪天以下の物質世界がそれぞれ破壊されること、そして第四禪天のみがすべての災害を免れることについて、阿含經典には何の説明もありますが、説一切有部の諸論書は次のようにいいます。初禪の境涯にとつて障害（内災）となるものは尋と伺（計らいと思惟）であり、それらは禪者を熱悩する火に他ならない。それに相應して、初禪天以下の外界は火によって滅ばされる。第二禪の内災は喜（身体的な喜び）であるが、それは禪者の心身を潤す水に当たる。そのために第二禪天以下の外界は水によって破壊される。第三禪には楽（精神的な幸福感）と出息・入息が内災となるから、第三禪天以下の外界は

風によって壊滅する。第四禪はいかなる障害にも妨げられず、不動であるから、第四禪天のみは三災を超越して破壊を免れる、と。色界の諸天は初禪・第二・第三・第四禪までの精神的境涯の外的な象徴であるといえます。このような小乗仏教の終末論においては、地球が三災によって破壊される前に、人間は、そして他の有情すべてもいったん人間に生まれ変わった上で、すべて自力によって禪を修めて第四禪天にまで上昇して災難を免れるわけです。

ここで色界第四禪について多少の解説をしておきましょう。仏教では有情とその環境世界とを欲界・色界・無色界という三界に分けます。前二界にはなお肉体あるいは物質が存在しますから、世界の終末において、第四禪天を例外として、色界第三禪天以下の欲・色界は三災によって破壊されてしまいます。無色界天は欲望も物質もない純粹に精神的な世界で、方位も場所もない無限の空間でありますから、物質世界の破壊である三災の影響を受けません。上に見たように色界第四禪には禪を妨げるいかなる障害、すなわち内災もないために、それに相應

する外災もなく、「不動」といわれます。禪（静慮）とか四禪と呼ばれる瞑想は原則的には色界の有情の境界であります。勿論、欲界の人間も四禪を修めることはできませんが、それは欲界にいながら欲望を超越して色界の境界に入ることによって可能になるわけです。

第四禪は仏陀や阿羅漢がそこから起って般涅槃する（絶対的なやすらぎの世界に入ること）所でありますし、また無色界の四つの瞑想（四無色定）は実は色界第四禪において修められます。世界の終末において第四禪天に上昇した有情は、そこから起って般涅槃するか、あるいは極めて長い寿命を保って次回に世界が成立するのを待つかするわけです。いずれにしても、それは、小乗仏教においてさへも、第四禪天にある有情が、壊劫の直後にくる空劫という空の世界において救済されることを含意しています。しかし、小乗仏教のこの救済には、(1)有情が自力によって無常と空のさとりに達するということと、(2)あらゆる有情の救済は世界の終末まで待たなければならぬ、という二つの限界もあつたわけです。

三 大乘仏教の神変

『大智度論』は『大品般若経』の仏の神変を解説するうちにこう言っています。仏が、神変を現すためにあらかじめ三昧王三昧に入るのは第四禪においてであり、また、第四禪天の最上層である色究竟天の上には大乘の菩薩の住所がある、と。また、直後に述べるように、三昧から起った仏がその身体の各部分から放つ光明を形容して、それは世界終末の劫火の輝き、つまり小乗仏教の大の三災の第一である火災、と同じである、と繰り返し述べています。『世記経』は、仏が世界の終末を語るのは有情たちに、あらゆるものは無常であるから努めて解脱の道を求めよ、と教えるためである、と再三言っていました。『大智度論』は、無常とは空の初門である、と宣言いたします。これらは、大乘の仏の神変を小乗の大の三災になぞらえらるゝとともに、大乘仏教においては、無常と空のさとりを得るために世界の終末を待つ必要はなく、現在、この世においてあらゆるものの空性をさとれば足りること、それはしかも宇宙的真理の具現者であ

る仏の神変の光に遇うことのみによって、いわば他力によって可能となることを宣言することでありました。大乘仏教はあらゆる有情を、阿羅漢ではなくて、仏陀と成らせること、声聞・独覺という小乗の聖者をも大乘の空のさとりに誘導することを目標としていました。神変は有情を、世界の終末を待つことなく、いま、ここにおいて、三界を超えた仏陀の世界に引き入れるものであつたのです。

以下、『大品般若経』の場合を例証として、仏の神変を三段に分けて簡潔に紹介しておきましょう。

(1) 釈迦牟尼仏は最高の瞑想である三昧王三昧に入つて念を凝らしていますが、三昧から起ち上がつて、その身の三十二相、すべての毛孔、常光明（常に身に備える光明）、舌などから順次に無量の光明を放ちます。その光明は全宇宙の十方の無量の世界に遍満します。その光明に遇った有情はみなこの上ない完全な仏のさとりに（阿耨多羅三藐三菩提・無上正等覺）に至ることに決定いたします。舌から出た光線の一々から宝石でできた千弁の蓮華が生じますが、その上には分身の化仏たちが坐つて六波羅蜜の

法、すなわち空のさとりを説きます。それを聞く有情たちも阿耨多羅三藐三菩提を得ることに決定いたします。

(2) ついで仏は獅子遊戲三昧に入つて、神通によってこの三千大千世界を六種に震動させると、有情たちは幸福になり、宇宙の十方にある無数の世界にある地獄・餓鬼・畜生の世界は根絶されて空となり、一切の災難は消失します。三惡道の者たちは死んで人間と六欲天の神がみに生まれ代わり、自国の仏陀たちのもとへ近づいて仏に帰依します。一方、この三千大千世界にあつては身心障害者たちはそれから回復し、狂者は正氣を得、乱心者の心は集中し、飢渴者は飲食に飽き、病者は無病となり、不善の行為をする者たちは善行をなすに至り、みな平等の心をもつて相互に接し、十善行を保ち、清浄な梵行者ともなりました。彼らはみな第三禪に入つた比丘のような妙樂を得るのです。

(3) 釈迦牟尼仏は光と妙形と焰と栄光に満ちて三千大千世界を圧倒して立ちます。仏が本来の人間としての常身を示すと、色界の諸禪天の神がみ、六欲天や人間たちが香料・花輪・衣・旗・蓮華・睡蓮などを持って釈迦牟尼

仏に近づいて、供養し、散華します。この三千世界も十方の諸世界も光り輝き、この三千世界の有情たちは十方諸世界の諸仏と有情たちを見、諸世界の有情たちはこの娑婆世界を見て、相互照見がなりたちます。十方世界の諸仏国土から派遣された諸菩薩たちが釈迦仏の集会に加わり、彼らの散華によってこの三千大千世界は浄土に変わります。

第一段の描くこと、三昧王三昧から起った仏の放光に遇う有情はみな無上正等覺を得るに至る (anuttara-samyak-sambodhan niyatāh)、すなわち正定聚に入る (samyakve niyatāh)、というのは、仏の、あるいは宇宙の真理である空性という他力による完全な救済を物語っているのです。もともと『大智度論』の解説によれば、これは仏に対する信仰をもつ有情にのみ起こることでもあります。

第二段には、獅子遊戲三昧から起った仏の放光が三惡道（地獄・餓鬼・畜生）を消失させ、人間や六欲天に生まれ代わった惡道の者たちが幸福となり、自国の仏のもとに至って仏教に帰依し、また人々が幸福となって十善行

を修め、身心障害者・病人・飢渴の者などがみな回復し、不善行の者たちがみな善行者にかわる、というのは、第一に小乗の終末論における惡道の有情や凡夫や六欲天の有情たちが天界に昇って救済されることに通じるとともに、第二に、それまで仏教に信仰をもたなかった者たちが自国の仏陀に帰依して仏教徒になり、救済とさとりへ誘導されることを意味しているのです。ここには、仏教に信仰をもつ者とそうでない者とは一応区別されて段階的に救済されているのです。

第三段の宇宙の諸仏国土よりの菩薩の娑婆世界への来訪とその諸仏国土と娑婆国土との相互照見、この三千大千世界が浄土となることなどは先に触れた『法華經』における釈迦牟尼仏の神変・神通力と同じであり、また『華嚴經』においても主要なモチーフになっているものです。

四 『大無量壽經』と神変

浄土教の基本經典である『大無量壽經』の序分には明らかに『華嚴經』の影響と見られる第十地の菩薩たちの「八相示現」（高位の菩薩が仏陀の生涯を示現すること）の神

変が長々と叙述されています。いまここではこの菩薩の神変に触れる余裕はありませんが、これも初期大乘經典の神変の一つであります。またアーナンダが西に向かつて釈迦牟尼仏を礼拝しますと、釈迦牟尼仏が姿を現して、全宇宙の一切の仏国土を現出し、釈迦牟尼仏は、あたかも須弥山が他のすべての山やまを高く抜きんで立つように、諸仏を超出して立ち、靈鷲山一帯が浄土に変わるという神変が記されています。これは、『法華經』や『大品般若經』の釈迦牟尼仏が釈迦牟尼仏に代わってはいるものの、同じ趣の神変であります。また、いまここに詳しく述べることはできませんが、『大無量壽經』の四十八願の多くは『世記經』の有情昇天や『大品般若經』の神変に現れた有情救済の諸相を、『華嚴經』における發展を媒介にして、釈迦牟尼仏の本願の形に書き換えたものであります。『大品般若經』の段階では神変の主役は釈迦牟尼仏であり、宇宙にはその分身としての無数の化仏がいます。これは『法華經』における仏身觀と同じものがあります。仏陀を法身（宇宙の真理としての仏）と色身（法身のこの地上における顯現としての仏）に分ける二身説は

『華嚴經』において初めて現れます。『大無量壽經』においては色身に当たる釈迦牟尼仏と法身あるいは受用身（報身とも言う。法身と色身とを媒介する仏身。釈迦牟尼仏はこの報身仏であるとされる）に当たる釈迦牟尼仏が現れますが、神変の主役は釈迦牟尼仏となっています。釈迦牟尼仏は放光の神変に代えて信心と念仏を有情に与え、浄土往生という形での「必ず無上涅槃を得るに決定すること」（正定聚、samyakve niyatāh）という救済を約束するのです。この正定聚という言葉は『大品般若經』における「阿耨多羅三藐三菩提を得るに決定すること」（anuttarasamyaksambodhan niyatāh）という語と意味において同一であります。

『大無量壽經』は二種類の往生を説いています。釈迦牟尼仏への真実の信心をもって念仏する者には真実報土へ往生して正定聚に入ることを約束しますが、他方で、仏を信ぜず、ただ浄土の幸福のみを求める功利心のみで念仏する者は化土（疑城胎宮）に留まって、報土に生まれる前に五百年のあいだ仏を見ず、法を聞くことができないという方便化土へ往生することになっています。この

二段階の救済も『大品般若経』における二段階の救済の影響のもとになったものに違いありません。このように見てくると、『無量寿経』は『大品般若経』の神変を繼承して阿弥陀仏の救済を説く經典として成立したものと見えるのであります。

五 終末論・神変と空思想

小乗仏教の「大の三災」の示している終末論はキリスト教などの西方の一神教の終末論と大變に違っておりま
す。『新約聖書』の「黙示録」に現れるキリスト教の終末論では、世界の終わりに、神に従う者たちの軍勢と悪魔に加担する者たちの軍勢とが戦い、ハルマゲドンにおける最終的な戦闘で神の軍隊が悪魔の軍隊を破り、神に信仰をもつ者たちは神の国へ迎えられる一方で、悪魔に加担した者たちは地獄に落ちます。ここでは人々は二種類に分けられ、その運命も全く異なったものとなります。

大の三災に描かれる小乗仏教の終末論では、世界の終末の時期には人々は最高の道徳的水準にあり、長寿・繁栄・幸福、そして平和を享受しています。そして火・水・

風の三災が起こってこの地球の物質世界を破壊する直前に、人間はもとより、地獄・餓鬼・畜生や神がみなどといった人間に生まれかわった後に、禪を修めて色界天に上昇して、世界壊滅の難を避けるのであります。風災という最終的な災害に先立って有情たちは第四禪にまで上昇して難を避け、そこから般涅槃するか、あるいは長寿を得て次の地球の成立を待つからです。ここでは世界の終末はあらゆる有情たちの救済に繋がっているのです。三災の後にくる、世界が無に帰して空間のみが残るという空劫とは、究極的なさとり、涅槃に導く空の洞察を象徴しているわけでありま

す。ここで詳しく論ずることは省略しますが、原始仏教におきましても、ブッダは無我を説き、「世界を空なりと観ぜよ」と言っていました。空の思想はあきらかに存在しておりました。アビダルマといわれる小乗部派の教学におきましては、原始仏教の精神から逸れた實在論も発生いたしました。幸いなことに終末論には原始仏教の空の思想が傳承されていたに違いないのであります。

大乘仏教の仏陀の神変は、小乗の大の三災を繼承しな

がらも、三災を仏の三昧の力（神通力）と放光に代え、その光明に触れる有情たちはすべて無上正等覺を得ることに決定するという思想を發展させました。また、未だ仏教への信仰をもたない有情たちを自国の仏陀に帰依させて救いに近づけ、身心障害者・病人を癒し、不道徳の者を道徳を守る者にかえるなどして、救済の道を用意しているのであります。これは仏の方便以外の何ものでもありません。なによりも、小乗の大の三災において有情たちの救済が禪を修行することによって可能となっていたものを、仏の光に触れて空をさるという他力の救済に代えているのです。ここでは出家・在家の別なく、あらゆる有情の救済が説かれているのであります。そして、その救済は世界の終末を待つまでもなく、いま、この世において、空をさることだけによって可能となったわけでありま

六 法華経・薬草喩品と空思想

このように考えてきますと、私は『法華経』の「薬草喩品」を思い出さずにはいられません。この章の構成は

上に述べてきた仏教の終末論の思想を別の形態で表現しているからであります。「薬草喩品」ではこの三千大千世界（いわば銀河系）にあるさまざまな種類の草・灌木・薬草・樹木が、三千大千世界を覆いつくして湧き起こる雲から降る雨水のおかげで育つてゆく有り様が語られます。草・灌木・薬草・樹木には細いもの、太いもの、大きなもの、小さいもの、若いもの、老いたものなど種々様々な区別がありますが、三千大千世界に降る雨は一味であります。それと同じように、仏の教えは、方便による説き方に種類の別があるとしても、解脱の味をもち、涅槃を究極の目的とし、つねに寂滅しているという点で一味であります。その教えを受ける有情たちには能力や努力の優劣の相違がありますから、教えの受取り方には凡夫・声聞・独覺・菩薩でそれぞれ相違があるものの、教えそのものは同じ涅槃を目的とする一味の教えに違いありません。その教えによって、「彼ら有情たちはまさしくこの現在（の世）において安楽なものとなり……その法を聞いてから、障害の除かれたものとなり、またその力量に応じ、その場所に応じ、その勢力に応じて、順々

に一切知者の法に専心するのである」。仏は言います。

「いやしい人々にも、卓絶した心の持ち主にも、機根の鈍い人々にも〔等しく〕私は法を説く。すべての怠惰な心を捨てて、私は正しく法の雨を降らせるのである」。

「この世の中には、これらのきわめて小さい薬草もあり、やや小さな薬草も、ほかに中位のものや、大きな薬草もある。お前たち、聞きなさい。それらをみな私は説明しよう。汚れない法を体得し、涅槃に到達している人たち〔すなわち声聞たち〕、また六種の神通を得、三種の英知〔三明〕をそなえた人たち、それらが小さな薬草といわれるのである。山窟に住む人たち、おのおの独自のさとり〔独覚あるいは縁覚のさとり〕を望む人たち、このように半ば淨らかな覚知のある人たち、それが中位の薬草といわれるのである。人中の牛王〔仏陀〕となることを目的とし、人間や神がみの保護者である仏陀に自分になるであろう、と言って、精進努力と禪定とを行う人たち〔すなわち菩薩たち〕、それが最高の薬草といわれるのである……常に世間を幸福にするこの教えなるものは、このあらゆる世間を法をもって満ち足らしめる。

するものに分かれたる。〔それら一切の有情に対して〕——正しい法の説法として平等にあらわれるのである……三つの乗り物〔の区別〕は〔眞實には〕存在しない。ただ有情たちがそれぞれ行動を異にするだけであり、それゆえに三つの乗り物が設けられるのである」。

「薬草喩品」には生まれつきの視覚障害者とその人を治癒する名医の喩が出てまいります。視覚障害のある人はこの世の中に太陽や月や人々や様々なものがあることを知りません。名医は病というものには風性のものと、胆汁性のものと、痰性のものと、それらの複合したものがあることを知っていて、また雪山には四種の薬草、(1)「あらゆる色と味の素因を具備した」という名の薬草、(2)「あらゆる病氣から解放する」という名のもの、(3)「あらゆる毒を消す」という名のもの、(4)「素因のそれぞれに応じて薬を与えるもの」と名付けられる薬草があることをも知っています。彼はそれらの薬草を探し求めて、視覚障害者に与えます。視覚障害者は視力を得て、それまでの自分が何も知らなかったことに気付くとともに、いまは視力を得て、すべてのものを見ることができ、自

満ち足りたすべての世間はやがて薬草の〔ように〕花を咲かせる。中位の薬草として生長せるものとは、煩惱の汚れないことに安住しているかの阿羅漢たちや、森林において修行する独覚たちのことで、彼らは、このよく説かれた法をふみ行つたものである。多くの菩薩たちは、志が篤くまた堅固で、三界に属する事物のすべてに渡って精通し、この最高の菩提を求めている。彼らは常に喬木のように〔大きく〕成長する。四種の禪定を行って神通〔の力〕を身につけ、空性〔の真理〕を聞いて喜びを生じ、幾千の光明を放つて〔人々を救う〕。彼らこそ、この世で巨木であるといわれるのである」。如来は同一の法を説くが、それに対して種々の解釈のあることが、一つの雨に対して個々別々の水滴があるようなものである、と『法華経』は言うのです。

「正しいさとりを得た尊敬さるべき如来たちの一切智者としての知から出る心の光は、あらゆる有情に対して——すなわち〔地獄などの〕五種類の境涯のなかに生まれてあり、その信への志向〔の異なるの〕にに応じて、大乘に属するもの、独覚の乗に属するもの、声聞の乗に属

分のような賢者は誰もいないのだ、という慢心さえもつようになります。それを知った聖者が、お前はいまはただ目が見えるだけのことであつて、家の中にいれば外のことは何も知らないし、人の心のうちも、遠方の音も、自分が母の胎内にいた時のことも前世の行動も知ることができないのに、どうしてそんなに高慢になれるのだ、と叱責いたします。そこで目の治つた人はあらためて自分の無知に気付き、聖者に問うて、善行と徳性とすべてを知る智慧を求め始めます。

その視覚障害者と同じように、輪廻のなかにいる有情たちは無明によつて盲いた障害者と同じであつて、苦しみの大きな塊の中にいるのです。如来はこの世にきたつて、有情たちが輪廻から離脱する道を説き、巧みな方便をもつて声聞・独覚・菩薩の三乗を説くのです。菩薩たちは無上のさとりを求める心を起こし、ものは本来生ずることがないと認容する知〔無生法忍〕を得て、この上ない正しい菩提をさとのであります。風と胆と痰の体液とは貪りと怒りと迷妄〔貪・瞋・痴〕のことであり、四種の薬草とは順次に「すべてが空であること〔空性〕」

「すべてに形相のないこと（無相）」「すべてが欲求の対象でないこと（無願）」および「涅槃の門」との四つに他なりません。空・無相・無願という三解脱門を修行して、人々は無明を滅するのです。視覚障害者が目を得るのと同じように、声聞の道に属し、独覺の道に属する人々も輪廻と煩惱との束縛を断つのですが、彼らはそれによって「さとなねばならない法はこれ以外にはない、私は涅槃に達したのだ」と思うに至ります。そのとき如来はこう言います。「すべての法を体得していないものにどうして涅槃がありえようか」と、また「これは静止であって、涅槃ではない」と。如来は彼を菩提に向けて鼓舞いたします。彼は菩提心を起こして、輪廻のなかに止まりはしないが、また涅槃に到達もしないもの、すなわち菩薩となります。彼は、三界に属するものはすべて空であることと、また世間は變化に等しく、幻に等しく、夢、陽炎、反響に等しいと見るようになります。彼はすべての存在について、生じることもなく、滅することもなく、束縛でもなく、解脱でもなく、暗黒でもなく、光明でもないと見ます。彼は見えないというあり方をもつて

見るのです。すべてのものは空であり、実体を離れている（無我）と知る人は、正しいさとりを得た世尊たちの菩提を真実に知るのである、と『法華経』は言っているのです。

「藥草喻品」の最後には「空」についてまとまった思想が詩節の形で説かれています。如来は声聞たちを無上正等覺に向けて鼓舞して言います。「一切を知ることなしには（真の）涅槃はありえない。このこと（すなわち一切智性）に向かって努力せよ。（過去・未来・現在の）三世に関する無限知と、淨らかな六種の完成の行（六波羅蜜）と、〔すべては〕空性であり、無相であり、無願であることと、〔最高の〕さとりを求める心と（それらについて努力せよ）。また、煩惱の汚れのあるもの（有漏）もその汚れないもの（無漏）も、いずれも虚空にも等しく寂靜である……〔あらゆる〕存在は、幻や夢を自体とし、芭蕉の茎のように実質がなく、反響に等しいものであると知る人、また三界に属するものはすべてこれら〔幻、夢など〕を自体とするのであって、束縛されたものでもなく、解脱したものでもない」と知り、涅槃をも識

別しない人、〔さらに〕すべての存在は平等であり、空であって、相互に相違することのないものであるが、これらを対象化することなく、どんな存在（法）をも見ることのしない人、このような人こそが偉大な智慧のあるものであり、残りなく存在の全体を見るものである……一切の法は等しく、あらゆるものは等しく、つねにまったく平等である。このように知ることによって、〔人は〕不死で吉祥な涅槃を知るのである」。

一切を知る、ということとは、あらゆるものが空である、ということを知ることです。それを知れば、空であるという点であらゆるものは平等であることが分かります。空を知ることとは、あらゆるものに実体がない、と知ることです。したがって、生死も涅槃も、輪廻も解脱も、実体がなく、空であるという意味で、それとして認識し、識別されることがありません。だからさとした人はいかなる存在をも見ることがなく、そのことこそが一切の存在を見ることである、という逆説が成り立つのであります。

龍樹（一五〇—二五〇年ころ）は、空とは、いかなるも

のにも実体（自性）がないことである、と言いました。その実体とは、他のものに依存することのない自立的で、けっして変化せず、そして永遠に存在する永続的な単体である、と言いました。そのような実体（自性）がいかなる存在にもないと知ることが空の智慧であります。私たちが身のまわりを見てみても、自立・不変・永続的な単体などはどこにもありません。机は樵夫が山の木を切り倒し、それを建具屋さんが机の形に細工し、ペンキ屋さんが色を塗り、誰かがそれをこの部屋に運んできて、この部屋の床の上に置かれて存在します。それは古くなれば変化し、割れば薪になり、燃やせば灰と煙になつてしまします。他のあらゆるものも同じように、必ず他のものに依存し、変化し、無常であり、複合的な存在でありますから、そこには実体はありません。ただ私たちが長いあいだ、机にある机という概念を机の本質であり、実体であると思ひこんできただけのことであります。しかし、概念は私たちの觀念にすぎず、外的な存在ではありませんから、机は実体をもたず、空である、というのが正しいのであります。

普通には、世界を創造した唯一の神とか、個人の靈魂である自我とか、物質的な世界では原子とかが実体と考えられています。神も靈魂も、生まれもしないし、死にもしません。肉体は死んでも自我は永遠に存在すると考えられています。原子は物質の究極的な要素としての単体である、と少なくとも十九世紀までは考えられていました。しかし、仏教は唯一なる創造神も、個体存在の中核である不滅の自我も、また原子という物質的実体をも初めから認めませんでした。現代の物理学でも、原子を物質の究極的な粒子としては認めていません。原子は原子核と電子に分解され、原子核は陽子と中性子に分解され、その陽子や中性子は三つの〔あるいは六つの〕クォークに分解され、クォークもお分解されるかもしれないからであります。素粒子物理学では、素粒子といわれるものはその位置と運動が同時には観測されず（ハイゼンベルクの不確定性原理）、それは粒子でもあり波動でもあり、いわば布に染み込んだインクのしみのようにボヤーっとした、不確定なものであります。素粒子の世界とは基本的にはただ確率的に予測できるだけで、確定値の得

られない世界であります。仏教も、そして現代物理学も、これらの実体の存在を否定するのであります。いわば現代科学でも空は真理として復権しているのであります。

（かじやま ゆういち・創価大学教授）

（本稿は一九九六年十月十六日に行われた当研究所主催の公開講演会における講演内容に加筆していただいたものです）